

古典に残る災害を讀んでみよう

巨大な地震や津波に繰り返し襲われてきた我が国では、古典文学の中にも災害の様子が描かれている。科学的な知識の乏しい時代に生きていた昔の人々と、現代の私たちとの災害に対する見方や考え方を比べてみよう。

1 「方丈記」を讀んでみよう

「方丈記」は、鴨長明(1155?~1216)が書いた鎌倉時代の随筆である。「大地震」の段には、1185(元暦2)年に発生し、琵琶湖南部から京都にかけて大きな被害をもたらした元暦地震についての様子が書かれている。その部分を口語訳で讀んでみよう。

生活の無意味さを語り、いささかの欲望や邪念の心の濁りも薄らいだように思われたが、月日が重なり、何年か過ぎた後はそんなことを言葉にする人もいなくなった。



地震で家が崩れ、人馬が倒れる様子『方丈記』(西尾市岩瀬文庫所蔵)

大地震(口語訳) また、元暦二年のころ、大地震があったことがある。そのまは尋常ではなかった。山は崩れその土が川をうずめ、海が傾いて陸地に浸水した。大地は裂けて水が湧き出し、大きな岩が割れて谷に転がり落ちた。波打ち際を漕ぐ船は波の上に漂い、道行く馬は足の踏み場に惑っている。いわんや、都のあたりでは至る所、お寺のお堂や塔も一つとして無事なものはない。あるものは崩れ、あるものは倒れている。塵や灰が立ち上がって、もうもうとした煙のようである。大地が揺れ動き家屋が倒れる音は雷の音とそっくりだ。(略) このようにひどく揺れることは暫くして止んだけれども、その余波は絶えなかった。びっくりするような地震が二・三十回と起こらない日はなかった。(略) その名残は三か月ばかり続いた。

(略) その直後には誰も彼もがこの世の無常とこの世の

2 「方丈記」に見られる地震の様子を抜き出そう

- 山
- 大地
- 海
- 余波(余震)

3 筆者のものの見方を私たちと比べてみよう

鴨長明は、「大地震」の最後を「すなはちは人みなあぢきなき事を述べて、いささか心の濁りもうすぐと見えしかど、月日かさなり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。」と結んでいる(口語訳は左ページの傍線部)。この結びに対する考えを、現代に生きる私たちと比べてみよう。

4 「平家物語」を讀んでみよう

「方丈記」に記された地震は、「平家物語」(作者未詳 13世紀半ばに成立)にも見られる。昔の人にとって、地震がいかに恐ろしいものであったかがよく分かる。

七月九日の午の刻ばかり、大地おびたしう動いてややひさし。幾内白河の辺六勝寺皆破れ崩る。(略) あがる塵は煙のごとし。崩るる音は鳴神のごとし。天暗うして日の光も見えざりけり。老少ともに魂を消し、朝衆ことごとく心をまよはず。遠国も近国も又かくのごとし。山崩れて河を埋み、海傾いて浜をひたす。(略) 大地裂けて水湧き出で、岩割れて谷へころぶ。(略) 白河、六波羅、京中にうちつづまれて死ぬる者、いくらといふ数を知らず。(略)

口語訳 七月九日、午の刻ほどに、大地が、長い時間おびただしく揺れ動きました。畿内、白河のほとり、六勝寺、皆、崩れました。(略) 建物が崩れる音は雷のごとく響き、舞い上がる塵は煙のようでした。空は暗くて光も見えず、老いも、若きも、魂を失い、朝廷に仕える人も、民衆も、皆、心を痛めました。また、遠国、近国でも同様でした。山が崩れて川を埋め、海が押し寄せて浜を浸しました。(略) 大地が裂けて水が湧き出で、岩ががれ、谷へ落ちました。(略) 白河、六波羅、都中で、埋もれて死んだ者は数えきれません。(略)